



岩^{いわ}婦^ぶの宿山本秀男

暖かいはずの房州でも、どうかすると雪のちらつく日があるという。私たちが岩井という海沿いの小さな町に到着した日は、そんな寒さの日の暮れだった。町は南北に細長く舗装してあつたが、それだけに北風はどこにもぶつからず、まっすぐに吹き抜けていた。自転車からおりると、ものの五分もたたないうちに

震えあがつてしまった。

そんなとき、私たちが火鉢に呼んでくれたのは常盤屋支店という菓子屋の細君だった。

「こんな寒い日に自転車じや大変でしょうねえ」

彼女はなんべんもそういつた。

「道楽なら寒中じつとして魚釣をする

人だつてあるくらいですから——」

そんな説明も、わりあいよくのみこんでくれたが、

「こんな夜は、薬湯に温まつてお寝みなさい。寒さを知らずに眠れますよ」と奨めた。

彼女はさつきから、岩^{いわ}婦^ぶ鉱泉に今夜の宿をとるように私たちに奨めていたので

サイクリングが旅の一つでもある限り、そこには旅人の眼がなければならぬ。旅をして何を見、何を感じ、何を得て来たか、一般の旅行者では殆ど訪れる事のない、房州のひなびたこの鉱泉はサイクリストのものであろう。そこにサイクリストでなければ書けないサイクリング紀行の一つの型がある。

ある。彼女は「第一、安く泊めてくれませう。そして歓待してくれませう」と推薦する理由を挙げていた。ただし半里以上山の中へ入らなければならぬとつけたした。

私には、彼女の説明のなかから、宿の輪郭を型造ることが骨であつたが、有線放送で宿を呼び出し、部屋の有無をたしかめるのを聞いては、逆らひきれなくなつてしまつた。もともと、金の続くだけ房総に遊ぼうと、東京を出てきたのだから、安く泊めてくれるという保証がある。以上逆らう必要もなかつたからである。同行の柴田君は、私にまかせるといふような顔をしていた。

菓子屋の主と、房州の海岸や山について雑談しながら手をあぶつているときには、すでに彼女が呼んだ迎への者が、宿を出て山をおりているはずだった。

思えば旅というもの面白。もしこの菓子屋で柴田君が百円足らずの買物をしなかつたら、岩婦の名前さえ知らずに旅を終つたらう。そして予定どおり同じ町外れの高崎鉱泉に泊つていたはずである。現にそのつもりで千葉街道をむやみに飛ばし、北風に追われて房州街道を下して、百三十軒の道のりをここまで走つてきたのだ。それが成行で、いつの間にか予定が交つてしまつたのである。

宿の迎えは、二十四、五とみえる若者

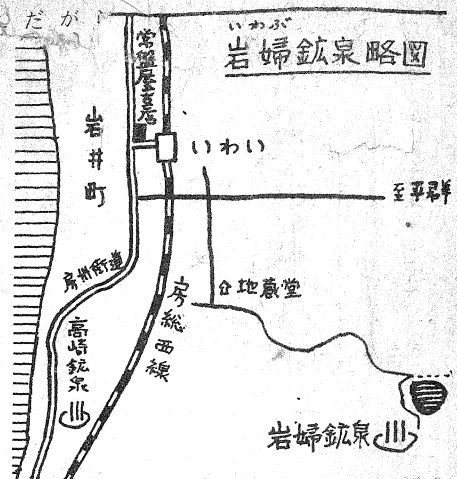
まつすぐに吹き抜けていた。自転車からおりると、ものの五分もたないうちに

彼女はなんべんもそういつた。「道楽なら寒中じつとして魚釣をする

彼女はさつきから、岩婦鉾泉に今夜の宿をとるように私たちに奨めていたので

宿の迎えは、二十四、五とみえる若者

岩婦鉾泉略図



の誇りであるようだった。富山は富士山をうんと小さくしたような山で、いかにも房州の山といった姿であつた。だが頂上の木の姿が夜目にもわかるような、とても小さな山であつた。はたして房州一かどか疑わしいとは思つたが、あまりに若者が純粹であつたので、あえて逆らわなかつた。それよりも、岩婦へいく段々島の中の道から、名のあふ山がみえることはやはり私たちにとつても楽しいことだつた。

愛宕山で四〇五米、有名な清澄山が二番目で三三三米、次に嶺岡山が三六〇米、その次が富山で三四九・五米であつた。若者は、この息子だそうだが、その後一度も顔を合せなかつたので、間違ひは指適しておくことができなかつた。

三方山に囲まれた岩婦は、北側だけ開けていた。そのせいだろう、北風がぶつかつてくるのがよくわかつた。宿は主家と浴室と二棟で、廊下が二つの棟をつないでいた。廊下の冷たさは素足には厳しすぎるほどだつた。とにかくその日の寒さは格別のものであつた。客間は二部屋あつて、床の間つきの十畳間と、切りこたつのある六畳間である。電気がないので石油ランプを使つて、古風なホヤは指でついたら割れてしまうのではないかと思うくらい、薄く見えた。それ程よく磨かれていた。天井をみると電気のこない蛍光灯が二本、白い線を画いていた。便所はランプがないから、懐中電灯をもつていかないと用が

だ。善良そうな、どちらかというところの体つきであつたが、足はなかなか強かつた。荷台に大きな駕籠をつけた重そうな実用車に乗つてきたが、デコボコな登り道を、ランプもつけず、どんどん山に入つていつた。私たちの車と一諸では、のろろ走つたのでは悪いと思つたのかも知れないが、私たちは少々閉口して

「あそこです。五万分の一の地図にはこの堰が出ています」

宿の主、鈴木進さんは表まで出て愛想よく私たちを迎えてくれた。自転車を賞めることも忘れなかつた。婆さんが部屋へ通してくれた。若者は、また有線放送で呼ばれたらしく、実用車で町までおりていつた。雇人がいないらしい。それぞれ仕事があるのだろう、姿は見えないがみんなであたふたしているのが目に見えるようであつた。

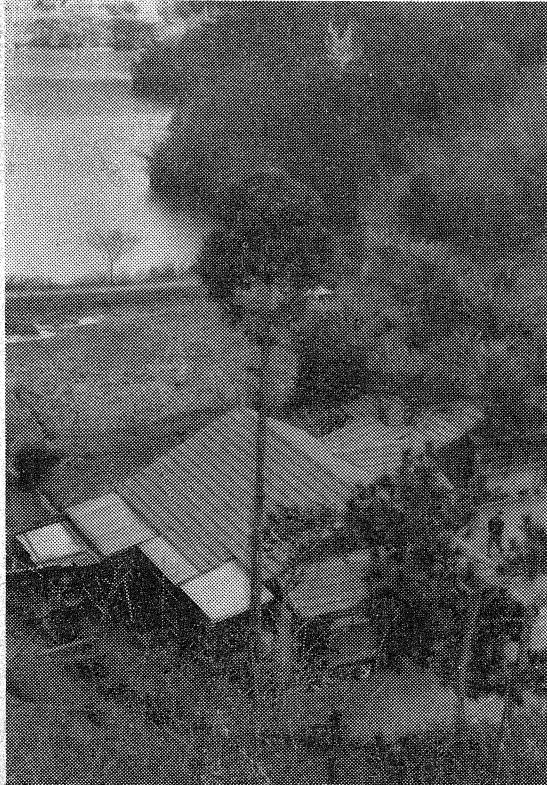
「あそこです。五万分の一の地図にはこの堰が出ています」

「あれが富山です」

「あそこです。五万分の一の地図にはこの堰が出ています」

「あそこです。五万分の一の地図にはこの堰が出ています」

「あそこです。五万分の一の地図にはこの堰が出ています」



岩婦鉾泉のたたずまい